

投稿

【論文】

日本における北欧受容—セルマ・ラーゲルレーヴを中心に

中丸 禎子

【要約】

明治から戦後までの日本における北欧文学の受容史を、セルマ・ラーゲルレーヴのそれを中心に概説する。具体的な考察対象は、新劇運動における北欧演劇の受容、女性解放運動・児童教育運動に対するエレン・ケイの影響、無教会グループを中心とした、平和主義としての北欧受容、山室静による北欧文学およびラーゲルレーヴ受容である。この研究の目的は、邦訳作品の傾向・翻訳者の関心のあり方と日本史・日本文学史上の立場を関係付け、北欧のステレオタイプ・イメージの起源を明らかにすることである。

【キーワード】

受容、北欧文学、日本、ラーゲルレーヴ

1. 問題意識と方法

本稿の対象は、スウェーデンの作家セルマ・ラーゲルレーヴ (Selma Lagerlöf, 1858-1940) をはじめとする、北欧の文学・文化の日本における受容である。その目的は、日本における北欧のステレオタイプ・イメージの「起源」を日本近代史に求めることである。現在の日本において、北欧諸国には「理想的な福祉国家、教育先進国」、「美しい自然と白夜の国」というステレオタイプ・イメージが定着している¹。『ニルスのふしぎな旅』(Nils Holgerssons underbara resa genom Sverige, 1906-07) の作者ラーゲルレーヴも、スウェーデンを代表する作家として、「無垢で善良な童話作家」、「母性豊かな平和主義者」というイメージを担っ

ている。この原因としてまず考えうるのは、北欧学を専門とする研究機関・教育機関の不足である。北欧学・北欧文学に関する詳細な研究は、他の分野に比べて極めて少なく、日本で得られる北欧の情報は偏り勝ちである。しかし、このようなステレオタイプは、北欧に関する知識が浅く、受容の歴史が短いただけに形成されたのだろうか。ことラーゲルレーヴに関する限り、必ずしも研究や情報の不足だけが、「過度な理想化」の原因ではない。というのは、上原進『セルマ・ラーゲルレーヴ原作の邦訳書リスト²』によれば、ラーゲルレーヴは実に百年にわたって邦訳され、今日に至るまでに、十数作品、二百版強が刊行されているからである。むしろ、翻訳がなされることによって、ステレオタイプは強化されている。本稿では、ステレオタイプがどのようにして成立したのかという問いを念頭に、ラーゲルレーヴをはじめとする北欧の文学・文化の、明治から戦後にいたるまでの受容のあり方を概説する。

受容史概説にあたっては、ラーゲルレーヴ作品の邦訳者の関心のあり方と日本史・日本文学史上の立場を考察する。すなわち、上原のリストを元に作成した、邦訳の刊行年順の〈表〉から、その背景となった日本史上の出来事・運動を推察し、訳者の立場・思想と受容のあり方の関係を分析する。ここで問題となるのは、邦訳者の知名度と翻訳数のアンバランスである。すなわち、森鷗外 (1862-1922) や野上彌生子 (1885-1985) のように、評価の定まった作家・翻訳家は、業績全体におけるラーゲルレーヴの比重が低く、彼らの関心

のあり方を直接知ることが困難である。一方、インガ・オサム（1910-94）や香川鉄蔵（1888-1968）のようにラーゲルレーヴをライフワークとした翻訳家は、他の業績や二次文献が少なく、彼らの日本史・日本文学史における位置を規定することが困難である。こうした事情から、本稿では、以下のような方法で考察を行った。

1. 日本史・日本文学史上の位置が定まった翻訳家に関しては、ラーゲルレーヴへの関心も、文学全体の業績と矛盾するものではないと考え、特に北欧文学の占める位置に注目した上で、業績全体を把握する。
2. 一般読書界であまり知られていない翻訳家に関しては、彼らが属するグループの北欧・北欧文学との関わりと、日本史・日本文学史に占める位置を確認する。

この結果、具体的には、以下について記述を行うこととなった。

- (1) 新劇運動における北欧演劇の受容
- (2) 女性解放運動、児童教育運動へのエレン・ケイ（Ellen Key, 1849-1926）の影響
- (3) 無教会グループを中心とした、平和主義としての北欧受容
- (4) 山室静（1906-2000）による北欧文学およびラーゲルレーヴ受容

〈表〉ラーゲルレーヴの主要邦訳
(邦訳の刊行年順)

邦訳 出版年	訳者	邦訳タイトル (所収、体裁)	原題の直訳 () 内は所収単行本タイトル
1905	小山内薫 (無教会)	彼得の母	我が主と聖ペテロ (キリスト伝説集)
1908	小山内薫	墓畔	墓地 (イエスタ・ベルリングのサガ)
1908	森鷗外	牧師	牧師 (イエスタ・ベルリングのサガ)
1914	神近市子 (青鞥)	私生児の母	沼の家の娘
1916	香川鉄蔵 (無教会)	むねあかどり	(キリスト伝説集)
1918	香川鉄蔵	飛行一寸法師	ニルスのふしぎな旅
1919	小林幸津子 (青鞥)	不思議のたび	ニルスのふしぎな旅
1921	福永挽歌	短編集	クンガヘラの女王たち
1921	福永挽歌	漁夫の指輪 『世界傑作童話叢書』	(見えざるきずな)
1921	野上彌生子 (青鞥)	グスタ・ベルリング『世界少年文学名作集』	イエスタ・ベルリングのサガ

邦訳 出版年	訳者	邦訳タイトル (所収、体裁)	原題の直訳 () 内は所収単行本タイトル
1928	生田春月 (キリスト教)	沼の家の娘	(あるサガの物語)
1928	生田春月	地主の家の物語	地主屋敷の物語
1934	香川鉄蔵	不思議な旅	ニルスのふしぎな旅
1938	Ishiga Osamu (無教会)	Betulehemu no Osanago ※エスベラントからの訳。表記はローマ字。	(キリスト伝説集)
1939	宮原晃一郎	ハルスタネスよりの話	ハルスタネスの話 (見えざるきずな)
1939	千葉省三	ニルスノバウケン	ニルスのふしぎな旅
1941	丸山武夫	グスタ・ベルリングの伝説	イエスタ・ベルリングのサガ
1941	西田正一	幻の馬車	御者
1941	西田正一	開かれた扉	(秋)
1942	石賀修	エルサレム 1	エルサレム 1
※訳者名漢字表記			
1942	前田晃	エルサレム 1	エルサレム 1
1945	インガオサム	キリスト伝説集	キリスト伝説集
1946	高崎毅	ベツレヘムのおさなご	(キリスト伝説集)
1948	万沢まき	コマドリの胸はなぜ赤い？	(キリスト伝説集)
1949	石丸静雄	沼の家の娘	(あるサガの物語)
1949	山室静 (近代文学)	幻の馬車	御者
1950	柴田治三郎	巴旦杏の花咲くころ	アンチ・キリストの奇跡
1951	万沢まき	沼の家の娘	(あるサガの物語)
1951	石丸静雄	軽気球	(あるサガの物語)
1951	石丸静雄	わが生涯の思い出	二つの預言 (トロールと人間)
1951	佐々木基一 (近代文学)	地主の家の物語	地主屋敷の物語
1951	万沢まき	アーネ師の宝	アルネ師の宝
1951	関淑子	ニルスのふしぎな旅	ニルスのふしぎな旅
1952	万沢まき	少年	(キリスト伝説集)
1952	インガオサム	エルサレム 2	エルサレム 2
1953	矢崎源九郎	ニルスのふしぎな旅 (第一部)	ニルスのふしぎな旅
1953	山室静	ニルスのふしぎなたび	ニルスのふしぎな旅
1953	矢崎源九郎	ニルスのふしぎな旅	ニルスのふしぎな旅
1955	尾崎義	ナザレにて	(キリスト伝説集)
1956	石丸静雄	乙女のふるさと	リリエクローナの家
1958	山室静	つるばらの間で	(見えざるきずな)
1958	石丸静雄	ニルスのふしぎな旅	ニルスのふしぎな旅
1959	石丸静雄	幻の馬車	御者
1960	上田健次郎	軽気球	(あるサガの物語)
1960	万沢まき	愛のふるさと 『世界名作全集』	リリエクローナの家
1960	大畑末吉	ニルスのふしぎな旅	ニルスのふしぎな旅
1961	山室静	沼の家の娘	(あるサガの物語)
1962	今西祐行 (キリスト教)	ふしぎな童話集	ニルスのふしぎな旅
1963	山室静	小鳥の巣の伝説	(見えざるきずな)
1963	高橋健二	世界動物童話集	ニルスのふしぎな旅
1965	山室静	軽気球	(あるサガの物語)
1967	高田敏子	子どものころのイエスさま	(キリスト伝説集)
1967	さとうひでか ず・しなこ (絵本)	へいしのみみだ	(キリスト伝説集)
1973	鈴木徹郎	沼の家の娘	(あるサガの物語)

邦訳 出版年	訳者	邦訳タイトル (所収、体裁)	原題の直訳 () 内は所収単行本タイトル
1973	鈴木徹郎	軽気球	(あるサガの物語)
1973	大久保エマ	クリスマスのバラ	(あるサガの物語)
1976	鈴木徹郎	クリスマス物語	キリスト伝説集
1979	中村妙子	クリスマスローズの伝説 (『クリスマス物語集』)	(見えざるきずな)
1979	雪室俊一	ニルスのふしぎなたび	ニルスのふしぎな旅
1980	きどのりこ	ともしび	(キリスト伝説集)
1980	島海永行 ※アニメ監督	ニルスのふしぎなたび	ニルスのふしぎな旅
1981	香川鉄蔵	軽気球	(あるサガの物語)
1981	インガオサム	ボルトガリヤの皇帝さん	ボルチュガリエの皇帝
1982	伊藤紀久代	聖夜	(キリスト伝説集)
1982	インガオサム	短編集	(トルロと人間)
1982	インガオサム	短編集	(見えざるきずな)
1982	香川鉄蔵・節	ニルスのふしぎな旅	ニルスのふしぎな旅
1984	インガオサム	短編集	(見えざるきずな)
1989	中村妙子	むねあかどり (絵本)	(キリスト伝説集)
1992	中村妙子	きよしこのよる (絵本)	聖夜 (キリスト伝説集)
1994	インガオサム	インガマルソン一族	インガマルソンたち (エルサレム)
1996	小塩節	聖夜	聖夜 (キリスト伝説集)
1996	吉田比砂子	インガマルソン家の人びと	エルサレム 1
1999	佐藤一郎	聖なる夜	聖夜 (キリスト伝説集)
2001	松岡尚子	グーラナの地主館奇談	地主屋敷の物語
2005	新妻ゆり	モールバック・ニルスの故郷	モールバック 1
2007	浦田温子	聖なる夜 (絵本)	聖夜 (キリスト伝説集)
2007	菱木見子	ニルスのふしぎな旅 (完訳)	ニルスのふしぎな旅

・上原進『ラーゲルレーヴ原作の邦訳書リスト』(2008)をもとに中丸が作成

・「キリスト教」、「無教会」は、洗礼を受けた者、および洗礼は受けていないが、キリスト教や無教会に影響を受けた経験を持つ者

2. 日本における北欧文学およびラーゲルレーヴの受容

(1) 新劇運動における北欧演劇の受容

1905 年、小山内薫(1881-1921)は、日本で初めてのラーゲルレーヴ翻訳となる「彼得の母」(*Vår Herre och Sankte Per*. In: *Kristuslegender*, 1904)を刊行した。小山内は、続いて1908年に「墓畔」(*Kyrkogården*. In: *Gösta Berlings saga*, 1891)を翻訳し、同年、森鷗外も「牧師」(*Prästen*. In: *Gösta Berlings saga*)を翻訳した。いずれも小品で、二人がどのような関心からこれらを訳したかは定かではないが、当時の鷗外と小山内には、共に「新劇運動」への参加という共通点があった。この運動では、イブセン(Henrik Ibsen, 1828-1906)、ストリンダベルイ(August Strindberg, 1849-1912)、ビョルンソン(Bjørnstjerne Bjørnson,

1832-1900)など北欧の「八十年代³⁾」文学が多く紹介され、鷗外によって翻訳された戯曲が、小山内の演出で上演された例も多かった。以下、「新劇運動」について概説する。

江戸時代には、演劇といえば歌舞伎であり、民衆の間で人気はあったものの、知識層には、史実を無視した筋書きや、残酷さ・猥雑さで人目を引く「低俗」な娯楽とみなされ、歌舞伎役者の地位も低かった[大笹 1996, p. 162]。しかし、開国以来、ヨーロッパの演劇事情が知られるようになると、演劇の近代化は日本が文明国として西欧と並ぶための急務となった。1880 年代、不平等条約の改正を目的とする欧化主義の流れの中、末松謙澄(1855-1920)らの「演劇改良会」(1886 年設立)を中心に、「演劇改良運動」が展開された[中村 1959, p. 38f.]。この運動は、文化人からの支持が低く、後援であった第一次伊藤内閣の退陣(1888 年)と共に幕を閉じるが、洋式劇場の普及や切符制度の導入など、演劇のハード面での近代化に一定の役割を果たした。「新劇運動」は、こうした流れを受けて、明治末期の1900 年代に展開した。「新劇運動」は、歌舞伎(旧劇)や新派劇(自由民権運動の思想宣伝劇)に対し、西洋の演劇を模した新しい演劇の確立を目指したもので、島村抱月(1871-1918)と坪内逍遙(1859-1935)の「文芸協会」(1906 年設立)、二代目市川左團次(1880-1940)と小山内薫の「自由劇場」(1909 年設立)、上山草人(1884-1954)が逍遙と鷗外を顧問として設立した「近代劇協会」(1912 年)などを中心に、欧米の演劇を翻訳・上演した。この中で、西欧演劇と並んで盛んに上演されたのが、当時のヨーロッパで演劇の最前線をなしていた、「八十年代」作家の戯曲だった。

とりわけ、イブセンが新劇運動に与えた影響は大きかった。1906 年の死去に際して追悼特集が組まれたことなどから、日本ではイブセンが流行し、「自由劇場」の第一回公演の演目には、イブセン『ジョン・ガブリエル・ボルクマン』(*John Gabriel Borkman*, 1896)が選ばれた。小山内は、すでにイブセン『ブランド』(*Brand*, 1865; 邦訳『牧師』1903 年)を邦訳していた鷗外に、『ジョン・ガブ

リエル・ボルクマン』の翻訳を依頼した。今日、鷗外の北欧文学の翻訳としては、アンデルセン (Hans Christian Andersen, 1805-75) の『即興詩人』(*Improvisatoren*, 1835; 邦訳 1901 年) がよく知られるが、本作とラーゲルレーヴ「牧師」を除けば、彼の北欧文学の翻訳はすべて、ストリンドベルイ⁴、ビョルンソン⁵、イブセン⁶の戯曲であり、その多くが上演を前提としていた。

2. (2) 女性解放運動と児童文学に対するエレン・ケイの影響

〈表〉によれば、鷗外、小山内による単発的な邦訳刊行の後、1920 年前後に翻訳が集中する。この時期の翻訳の特徴は、以下の二点である。一点目は、児童文学としての翻訳が多いことである。『ニルスのおしぎな旅』の翻訳が相次いで出版されたほか、大人の読者を想定して書かれた『イエスタ・ベルリングのサガ』なども、児童文学として翻訳されている。現在の日本において、ラーゲルレーヴは児童文学作家として認知され、大人の読者を対象として刊行される場合にも、時事問題を扱った大長編よりは、家族愛や自然美を特色としたメルヒェン的な短編・中編が好まれるが、その「原点」がこの時期にあると言える。二点目は、この時期の翻訳者のうち、小林哥津子(1894-1974)、野上彌生子、神近市子(1881-1981)の三人が、〈青鞥〉のメンバーとして活動した経歴を持つことである。また、福永挽歌(1886-1936)も、児童文学の翻訳の他、『婦人参政権運動』(1915 年)を執筆するなど、児童文学と女性解放運動の双方に関わっている。この章では、〈青鞥〉の活動を中心に、日本における女性解放運動と児童文学について概説し、これらに対するスウェーデンの思想家エレン・ケイの影響を指摘する。

日本における最初的女性解放運動は、1873 年に解禁されたキリスト教の影響のもと、1880 年代後半に一夫一婦制の確立や廃娼など近代家族制度の成立を求めて展開された〔森岡 2005, p. 241〕。しかし、教育勅語と民法が公布され(1890 年)、法的な一夫一婦制が確立する一方、集会及結社法(1890 年)、治安警察法(1900 年)によって、女

性の政治活動が厳しく制限されると、この運動は沈下した。1890 年代には、樋口一葉(1872-96)、與謝野晶子(1878-1942)、若松賤子(1864-96)らが活躍したが、女性の社会活動は文芸面に限られていた。1900 年代に入ると、社会主義の立場から家族・国家制度への批判を含む女性解放運動が展開されたが、明治憲法下の家族制度は、天皇制の根幹を成すものであっただけに、こうした女性解放運動は厳しく弾圧された〔猪野ほか 1969, p. 154〕。政治的な動向と並行して、文学の側から女性解放運動の高揚を促したのが、ヨーロッパ文学における女性作家の活躍や、作品内の女性描写だった。例えば森鷗外は、「棕鳥通信」(〈スバル〉1909 年 3 月-1913 年 12 月)その他で、欧米の新聞から最新のニュースを紹介し、その中でしばしば女性作家や女優の活躍に触れ、ラーゲルレーヴも女性初のノーベル文学賞受賞(1909 年)者として紹介している〔森 1972, p. 108, 118, 149, 171, 778, 786f.〕。また、新劇運動で紹介されたイブセンも、日本の女性解放運動に重要な役割を果たした。1911 年 9 月、「文芸協会」が、日本で初めて『人形の家』(*Et Dukkehjem*, 1879)を上演し、松井須磨子(1886-1919)がノラを演じた。本格的な劇に女優が起用されたのはこれが初めてであり、同公演は評判を呼んで同年 11 月に再演された。また、「近代劇協会」も、1913 年、14 年に森鷗外訳『ノラ』⁷を上演した。

平塚らいてう(1886-1971)らにより、〈青鞥〉が創刊されたのは、『人形の家』初演と同じ 1911 年 9 月である。〈青鞥〉でも「ノラ特集」が組まれる(1912 年 1 月号)など、イブセンへの関心は高かった。青鞥社は当初、女性の法的・政治的解放ではなく、女性に自己表現の場を提供することを目的とする文芸団体⁸だったが、度重なる発禁処分や、社員の私生活に関する暴露記事から否定的な世論が形成されると、女性を縛る社会的な制度そのものに目を向けるようになる。その過程で、らいてうが、金子築水(1870-1937)「現実教」(〈太陽〉1912 年 9 月号)、石坂養平(1885-1969)の「自由離婚説」(〈帝国文学〉1912 年 12 月号)を通じて「発見」したのが、エレン・ケイだった〔〈青鞥〉

1913年1月号、付録p. 1]。ケイは、スウェーデンの女性解放運動家フレドリカ・ブレイメル (Fredrika Bremer, 1801-65) が、男女の絶対的な同権を主張したのに対し、女性が家庭において母親として果たす、子どもを生み育てる役割の評価を求め、スウェーデンの女子教育・児童教育の発展に尽くした思想家である。『ニルスの不しぎな旅』は、社会科の教科書として執筆されたが、その背景にも、ケイの教育理論があった。らいてうは、1913年1月号で、女性問題の特集を組み、ケイ『恋愛と結婚』(*Livslinjer I. Kärleken och äktenskapet*, 1904) の翻訳を連載し始める。この後、伊藤野枝 (1895-1923) が『恋愛と道徳』(1913年5月号)、山田わか (1879-1957) が『児童の世紀』(*Barnets århundrade*, 1900; 翻訳 1915年7月号、同年10月号-1916年2月号) の翻訳を掲載した。〈青鞥〉は、1916年2月号を以て無期休刊となるが、女性問題への関心を高め、大正デモクラシー期の女性解放運動へと引き継がれていく。この際にも、らいてうや山田の運動に、ケイの影響は色濃く表れていた。1918年、らいてうは、〈婦人公論〉誌上で、女性は男性からも国家からも自立するべきだと主張する與謝野晶子らに対して、妊娠・出産・育児期の女性を国家が保護すべきだと主張し、「母性保護論争」と呼ばれる論争を展開した。山田わかは、1934年、母性保護法制定促進婦人連盟 (1935年母性保護連盟と改称) の初代委員長に就任、1937年の「母子保護法」の成立に貢献した。

エレン・ケイは、日本における「児童」の概念の成立にも貢献した。19世紀末、イギリス、アメリカで、従来の書物中心教育を批判し、児童の自主性・主体性を重んじる「新教育 (New Education)」運動が興ったが、ケイの代表作『児童の世紀』は、その論理的支柱の一つだった。「新教育運動」は、大正期の日本にも波及し、大正デモクラシーを背景に、「大正自由教育運動」へと展開した。この運動を受けて、自由学園など斬新な教育方法を取り入れた学校が次々と新設・改組されたほか、1918年に鈴木三重吉ら⁹によって雑誌〈赤い鳥〉が創刊されるなど、児童文学も成熟期を迎えた。

2. (3) 無教会グループによる、平和主義としての北欧受容

上記の二つの流れにおいて、一人の訳者が複数のラーゲルレーヴ作品を訳したケースは極めて少ない。このことは、例えば新劇運動においてイブセンが、女性解放運動・児童教育運動においてケイが、作家・思想家として関心を持たれ、包括的に受容されたのに対し、多くの翻訳者にとって、ラーゲルレーヴへの関心は個々の作品へのそれにとどまり、作家への関心には発展しなかったことを示している。こうした中、複数の作品を手がけた訳者には、キリスト教徒や、洗礼は受けていないものの、キリスト教に強く接近した経験を持つ者が多い。この中で特に注目すべきは、日本におけるラーゲルレーヴの著作権所有者であった香川鉄蔵と、ノーベル賞受賞作『エルサレム』等、児童文学以外の作品を多く訳し、翻訳数で抜きん出るイシガ・オサムである。他の翻訳家がラーゲルレーヴを英語やドイツ語から重訳し、他の業績も多く残したのに対し、香川とイシガはスウェーデン語を独習し、原文から翻訳したばかりか、業績がほぼラーゲルレーヴ翻訳に限られ、作家への関心の高さがうかがえる。香川は内村鑑三 (1861-1930) に、イシガは賀川豊彦 (1888-1960) や矢内原忠雄 (1893-1961) に強く影響された人物だった。ここでは、キリスト教、とりわけ内村と無教会グループの、北欧との関わりに着目する。

1873年、明治政府はキリスト教を解禁した。以降、キリスト教は、雑誌の刊行、学校運営や慈善事業を通じて、受洗しなかった日本人に対しても、西洋近代の家族観や社会参加のあり方を示した。また、新約聖書 (1880年)、旧約聖書 (1888年) の翻訳や、『新撰讃美歌』の刊行 (1888年) は、日本の古典文学・詩歌とは違う内容と文体を示して、近代文学の成立に貢献した [久山 1956a, p. 146f.]。一方で、江戸時代以来の、キリスト教を邪教ととらえる風潮は根強く、内村の不敬事件 (1891年) を機に、一神教であるキリスト教は現人神としての天皇をいただく日本の国体とは相容れない、という世論が形成されていく。1889年にはキリスト教内部で「新神学論争」が起こり、1910

年の大逆事件では、大石誠之助 (1867-1911) らキリスト教徒が無実の罪で処刑されるなど、1890 年頃から 1910 年頃までは、日本のキリスト教にとっての「試練の時代」だった[森岡 2005, p. 12f.]。

「試練の時代」は、翻って、キリスト教徒自身が信仰のあり方や教義について再思考し、独自の思想を展開していく時期でもあった。1895 年に来日した救世軍をはじめ、キリスト教徒は、孤児院・病院の建設や貧民救済など社会改良に努めたが、こうした動きから、木下尚江 (1869-1973)、阿部磯雄 (1865-1949)、賀川豊彦らのキリスト教社会主義、ひいては社会主義が確立された[大内 1970, p. 395; 山泉 2001, p. 51]¹⁰。内村鑑三が、後に「無教会主義」と呼ばれる独自のキリスト教思想を展開したのも、この時期である。不敬事件で第一高等学校を辞職した内村は、1897 年から黒岩涙香 (1862-1920) の新聞〈万朝報〉の英文欄主筆を務めるが、1903 年、黒岩が日露戦争の開戦を主張すると、幸徳秋水 (1871-1911)、堺利彦 (1871-1933) と共に非戦論を唱えて退社し、以降は、〈聖書之研究〉などの雑誌の刊行と「聖書研究会」に専心した。「聖書研究会」には、当時、第一高等学校校長であった新渡戸稲造 (1862-1933) の影響で、矢内原忠雄ら第一高等学校や東京帝国大学の学生・卒業生が多く参加し、後にキリスト教界・政界・経済界を担う人物を多数輩出した。「聖書研究会」や、〈聖書之研究〉において、内村は、『デンマルク国の話—信仰と樹木とを似て国を救ひし話』(1911 年)、『樹を植ゑよ』(1924 年)、『西洋の模範国デンマルクに就て』(1924 年) 等で、エンリコ・ダルガス (Enrico Dalgas, 1828-1894) を繰り返し紹介している。ダルガスは、第二次スレースヴィ戦争敗戦 (1864 年) 後、植林によって国力の回復に努めた工兵士官である。内村によるデンマーク受容は、渡瀬寅次郎 (1859-1926)、平林広人 (1886-1986)、加藤完治 (1884-1967)、松前重義 (1901-81) らに、「理想的な農業国」という現在につながるデンマークのイメージを抱かせ、成人教育機関フォルケホイスコーレへの関心を興させる契機となった[小山、オンライン]。

内村は、日清戦争時には、『Justification of

the Corean[sic] War (日清戦争の義)』(1894 年) を執筆して日本の正当性を主張したものの、日露戦争時には非戦論へと転じた。しかし、その後、世論が戦争に傾く中、キリスト教界は全体としては、政治権力・社会体制に妥協し、組み込まれていったとされる[久山 1956b, p. 336f.]。1912 年、首相原敬 (1856-1921) が、神道・仏教・キリスト教の代表者を招き、動揺した人心の教化と国家的事業への協力を要請すると、キリスト教会もこれを受諾し (三教会同)、第一次世界大戦では兵士の慰問などを行った他、韓国併合 (1910 年) 後は、朝鮮総督府の機密費から支援を受けて、朝鮮半島での伝道を行った[森岡 2005, p. 450]。昭和に入り、軍国主義・国粋主義が強化されると、キリスト教は西洋の宗教として弾圧を受けた。1939 年に「宗教団体法」が成立すると、キリスト教会も軍部の統治下に置かれ、1941 年、プロテスタント 32 教派が自発的に統合して「日本基督教団」を結成、戦争協力を表明した¹¹。こうした中、イシガ・オサムは、内村や矢内原、賀川の影響の下、軍国主義に対するレジスタンスとして、ラーゲルレーヴを翻訳した[イシガ 1952, p. 475f.]。イシガは、1943 年、『エルサレム』第二部の訳了と同時に、兵役拒否を表明して憲兵隊に出頭し、拘留された[イシガ 1976, p. 206f.]。彼は同年 12 月に翻意して釈放されるが、戦後も、『キリスト伝説集』、『ポルトガリヤの皇帝さん』(*Kejsarn av Portugallien*, 1914)、『ラーゲルレーヴ反戦短編集』(複数の短編集からイシガが編集したもの)、『木の聖書』(同) と、長きに渡って、平和主義のキリスト教徒としてのラーゲルレーヴを翻訳し続けた。

2. (4) 山室静の北欧文学およびラーゲルレーヴ受容

以上の三つの流れにおいて、ラーゲルレーヴおよび北欧文学の受容は、女性解放運動や児童教育、平和運動といった、文学以外の活動の副産物だった。こうした受容においては、英米・ロシア・ドイツ・フランス文学とは違う「北欧文学」という枠組みへの意識は低かったと考えられる。例えば、新劇運動で受容された「八十年代」文学の自然主

義的傾向は、「牧歌的」なイメージ形成の妨げにはならなかったようだ。こうした中、日本で初めて、包括的・体系的な枠組みとしての「北欧文学」に取り組んだのが、山室静である。ここでは、山室の「近代」へのこだわりとラーゲルレーヴ批判のあり方を、日本における北欧文学とラーゲルレーヴの受容の特色と結びつけることで、「牧歌的」、「前近代的」な作家像形成の根拠を探る。

山室は、昭和初期にはマルクス主義運動に深く関わり、数度の拘留の後に転向した経歴を持つ。戦後は、同じ経歴を持つ荒正人（1913-79）、小田切秀雄（1916-2000）、平野謙（1907-78）、本多秋五（1908-2001）、埴谷雄高（1909-97）、佐々木基一（1914-93）とともに、雑誌〈近代文学〉（1946-64）を創刊し、終刊号では編集を担当するなど、「言わば「近代文学」と生死を共にしたとも言える密接な関係をもった一人」だった[山室1981, p. 2]。〈近代文学〉は、政治に対する文学の自律と人間の主体性を問い、戦後20年にわたって日本の文学界・批評界をリードした雑誌である。山室自身は、自らの同人活動を、「北欧文学の研究などに「ママ」あまり他人のやらない道を開くことにつとめたが、結局埋め草的存在に終始した」と回想する[山室1981, p. 2]が、佐々木がラーゲルレーヴ『地主の家の物語』(*En herrgårdssägen*, 1899)を訳したり、荒が山室と共にアイスランドを訪ねたり[荒1962]、埴谷が『死霊』で『巫女の予言』の一節を引用したり[埴谷2000, p. 261f.]するなど、北欧文学に関わった〈近代文学〉同人は少なくない。山室の北欧文学に関する功績は、エッダ、サガ、ビョルンソン、アンデルセン、ヤコブセン（Jens Peter Jacobsen, 1847-85）、ウンセット（Sigrid Undset, 1882-1949）、ラックスネス（Halldór Kiljan Laxness, 1902-98）、ヤンソン（Tove Jansson, 1914-2001）、リンドグレン（Astrid Lindgren, 1907-2002）等の翻訳、北欧文学通史『北欧文学の世界』（1969年）やエッセイ集『北欧文学ノート』（1980年）の執筆など、膨大・多岐に渡る。ラーゲルレーヴに関しては、『ニルスの不しぎな旅』、『幻の馬車』(*Körkarlen*, 1912)を翻訳したほか、「セルマ・ラーゲルレーヴ素描」[山室1969,

p. 251-259]、「ラーゲルレーヴ生誕百年に寄せて」[山室1980, p. 75-76]などのエッセイを執筆した。これらにおいて、山室は、冬戦争の最中（1940年）に発せられた「平和になるのでしょうか」というラーゲルレーヴの「最期の言葉」を好んで引用し、彼女の平和主義を強調している。この点で、山室の受容はイシガと共通する。一方、その相違点は、山室が、彼女の「近代性」の欠如を批判している点である。すなわち、山室は、ストリンドベルイやウンセットの近代性を高く評価する一方、ラーゲルレーヴの特色として、牧歌、想像力、母性、ヒューマニズム等を挙げ、これらは彼女の天分であると同時に限界でもあり、「現在の目から見ればあまりにも素朴な牧歌的な」彼女の作品には、近代文学としてあるべき葛藤が欠如していると批判する[山室1969, p. 253]。この、善意、愛、母性に満ちた「前近代」的作家という像は、肯定的であれ、否定的であれ、石丸静雄（1912-88）や万沢まき（1910-2009）ら、戦後のラーゲルレーヴ翻訳者にも共通する。

山室にとって「近代」とは何かという問題を、ここで十分に論じることはできないが、ここでは、山室の「近代」へのこだわりが、彼が「近代」的でないと捉えるラーゲルレーヴを「牧歌的な児童文学」作家へと局限した可能性を指摘したい。山室が、戦後、人間と文学の新しいあり方を模索して創刊した雑誌は「近代文学」という名だった。また、山室は、転向期にカトリックに傾倒しながら、結局は洗礼を受けなかった理由として、「死ぬまでは一人の弱い人間としての迷いと不安の中にも、自己の理性に従って歩んでゆきたいとする近代人の愚かな誇りがやはり捨てきれない」ことを挙げている[山室1980, p. 78]。更に、山室は、転向理由の一つに、日本や中国の古典文学が自分の感性の根幹を成していたことを挙げながら、転向後も、古典文学に積極的に関わることはなく、近代文学を多く紹介した。山室にとって、東洋の古典世界は、感性が根付く「心のふるさと」ではあり得ても、近代作家が近代的理性を以て作品を書く場所、「近代人」が生きる場所ではない。山室が「素朴」で「牧歌的」、裏を返せば「悩み」、「迷

い、「理性」と無縁な作家と捉えるラーゲルレーヴもまた、彼にとっては、このカテゴリーに属す、愛すべきだが問題意識を共有する同志ではない、「なつかしい作家」[山室 1980, p. 76]なのである。

3. まとめ

新劇運動において、「北欧文学」は、「ヨーロッパ文学」の一つであったが、女性解放運動、キリスト教、山室による北欧受容には、西欧とは別の近代化モデルとして北欧を「発見」という共通点が見られる。明治初期、近代化・西欧化とは、社会改良と人間の解放を意味していた。しかし、近代化が進むにつれて、その弊害や不完全さも明らかになった。人間の解放は女性解放ではなく、神の絶対性と隣人愛を説くキリスト教は天皇制ファシズムと共存し、日本の独立はアジア諸国の植民地化と戦争を意味し、貧富の差と社会の不平等を解消するはずのマルクス主義は、日本の民衆の実態と乖離していた[久山 1956b, p. 234]。こうした中、本稿で挙げた北欧文学・思想の受容者たちは、「近代」を全面否定するのではなく、別の近代化、あるいは真の近代化を模索し、西欧やアメリカとは違う近代化モデルとして、北欧を「発見」した。

しかし、彼らが北欧を「理想像」として紹介する際、その政治的・歴史的な背景を、必ずしも十分に顧みていたとは言えない。また、その後、彼らの思想や文学の受容と共に、彼らが「理想」とした北欧が、実像以上に好意的に受容されたことも推察される。例えば、イシガ、山室以降のラーゲルレーヴ翻訳の後書き等で、彼女の政治性や社会性を問題にしたもの、「善意」や「愛」、「母性」、「平和主義」を懐疑的・批判的に論じたものは少ない。

今後は、上記の推察を、戦後を含めたより詳細な分析を通じて立証していきたい。また、近年のラーゲルレーヴの再受容・再評価は、テレビアニメ『ニルスのふしぎな旅』(鳥海永行監督、1980-81)によるところが大きい¹²。今後は、文学にとどまらず、広く一般に流布した北欧イメージの根拠を、文化批判的に検証していきたい。

¹ 例えば、デンマークが一位の「幸福度ランキング」(日経ビジネスオンライン、2007 年 8 月 29 日、<http://business.nikkeibp.co.jp/article/world/20080828/169050/>)、北欧諸国が上位を占める「ジェンダー・ギャップ指数」(内閣府・男女共同参画室「共同参画」2008 年 10 月号、http://www.gender.go.jp/main_contents/category/kyodo/200901/200901_10.html)などに比して、北欧が「負の部分」で際立つランキングや指標の紹介は少ない。また、Amazon で、北欧諸国名を入れて検索を行うと、『世界一幸福な国デンマークの暮らし方』(千葉忠夫、PHP 研究所、2009)、『スウェーデンに学ぶ「持続可能な社会」』(小澤徳太郎、朝日選書、2006)、『ノルウェー フィヨルドの旅』(村上よしゆき、NTT 出版、1998)、『フィンランド 豊かさのメソッド』(堀内都喜子、集英社新書、2008)といったタイトルが上位に来ることからも、北欧には、多くの点を見習うべき「理想国家」との認識が強いことが窺える。(閲覧はいずれも 2010 年 3 月 1 日)

² 本研究の資料収集に際しては、このリストを出発点とした。ラーゲルレーヴの邦訳は、出版時期が古く、電子情報化されていないものも多いため、入手はおろか存在の確認も容易ではない。上原は、対象作品を古書店で丹念に探し、入手困難なものも国会図書館などで現物の確認に努めている。今回は、未出版の同リストを、上原の好意を得て使用した。上原の支援と使用許可に感謝するとともに、長年にわたる地道な努力に敬意を表したい。

³ 「八十年代 (ättitalet)」文学とは、北欧の 1870 年代から 1880 年代に興った自然主義的傾向を持つ文学である。これに対して、1880 年代末から 1910 年頃にかけて、反自然主義的な「九十年代 (nittitalet)」文学が興った。ラーゲルレーヴは後者に属している。

⁴ 森鷗外が翻訳(ドイツ語から重訳)したストリンデルベルイ作品は、以下のとおりである(邦題の後ろのカッコ内は、(原題、原出版年、ドイツ語の題、ドイツ語出版年、日本語出版年)。以下の 2 つの註も同様)。『債鬼』(*Fordringsägare*, 1888-89; *Gläubiger*; 邦訳 1910 年)、『一人舞台』(*Den starkare*, 1889; *Die Stärkere*; 邦訳 1911 年)、『パリアス』(*Paria*, 1889; *Paria*; 邦訳 1911 年)、『稲妻』(*Oväder*, 1907; *Wetterleuchten*; 邦訳 1914 年)、『ペリカン』(*Pelikanen*, 1907; *Der Scheiterhaufen*, 1908; 邦訳 1920 年)。

- ⁵ 『人力以上』(Over Ævne I, 1883; *Über die Kraft*, 1896; 邦訳 1911 年)、『手袋』(*En Handske*, 1883; *Ein Handschuh*, 1888; 邦訳 1911 年)。
- ⁶ 『幽霊』(*Gengangere*, 1881; *Gespenster*, 1884; 邦訳 1911 年)、『ノラ』(*Et Dukkehjem*, 1879; *Nora oder ein Puppenheim*, 1880; 邦訳 1913 年)。
- ⁷ 1911 年に「文芸協会」が上演した『人形の家』は、島村抱月が英語訳から翻訳した台本によった。「近代劇協会」による上演に際して、森鷗外はドイツ語訳『ノラあるいは人形の家』(註 6 参照)から同作を翻訳し、タイトルもそれに倣って『ノラ』とした。
- ⁸ 治安警察法・集会及政治結社法により、女性の政治結社は禁じられていたため、文芸誌でなければ、女性を発起人とした雑誌は認可されなかった。
- ⁹ 賛同者に、泉鏡花、芥川龍之介、小山内薫、森鷗外、北原白秋、島崎藤村、小川未明、谷崎潤一郎、野上豊一郎、野上彌生子、有島武郎、菊池寛、三木露風、山田耕筰など。
- ¹⁰ 1901 年、片山潜、阿部磯雄、木下尚江、幸徳秋水、西川光二郎、河上清の 6 人により、社会民主党が結成されが、このうち幸徳を除く 5 人がキリスト教徒だった[山泉 2001]。
- ¹¹ 日本基督教団は、1967 年 3 月 26 日、総会議長鈴木正久の名で「第二次世界大戦下における日本基督教団の責任についての告白(戦争責任告白)」を公表した。[日本キリスト教歴史大辞典編集委員会 1998, p.794]。
- ¹² 『ニルス』の翻訳 125 種のうち、25 種は 1980 年以降に刊行された[上原 2008]。

参考文献

- ・荒正人『ヴァイキングの末裔—北欧紀行』、河出書房、1962 年。
- ・猪野謙二、岸本英太郎、久山康、松本三之助、渡辺徹「曲折する近代思想の成長」、家永三郎ほか編『近代日本思想史講座 1 歴史的概観』、筑摩書房、1960 年。
- ・イシガ・オサム「あとがき」、ラーゲルレーヴ『エルサレム 第二部』所収、岩波書店、1952 年。
- ・イシガ・オサム『神の平和—兵役拒否をこえて—』、新教出版社、1971 年。
- ・上原進『セルマ・ラーゲルレーヴ原作の邦訳書リスト』、1998 年作成、2008 年改版(未出版)。
- ・内村鑑三『内村鑑三全集』、岩波書店、1984 年。
- ・海老沢有道、大内三郎『日本キリスト教史』、日本基督教団出版局、1970 年。
- ・大笹吉雄「演劇の変革」、久保田淳ほか編『岩波講座 日本文学史 第十一巻 変革期の文学 III』、岩波書店、1996 年、155-175 ページ。
- ・尾崎宏次「現代の演劇—明治以後の戯曲と新劇運動—」、『岩波講座 日本文学史 近代 I 第十一巻』所収、1958 年。
- ・香川鉄蔵先生追悼集刊行会編『香川鉄蔵』、香川鉄蔵先生追悼集刊行会発行、1971 年。
- ・川西政明「解説 おだやかで普遍的な世界」、荒井武美「山室静年譜・著作目録」、山室静『評伝森鷗外』所収、講談社文芸文庫、1999 年、262-299 ページ。
- ・久山康編『近代日本とキリスト教 明治編』、基督教徒兄弟団発行、創文社、1956 年 a。
- ・久山康編『近代日本とキリスト教 大正・昭和編』、基督教徒兄弟団発行、創文社、1956 年 b。
- ・青鞜社〈青鞜〉、1911 年 9 月-1916 年 2 月。
- ・鳥海靖、野呂肖生、三谷博、渡辺昭夫『現代の日本史』、山川出版社、1997 年。
- ・中村光男「日本の近代化」、亀井勝一郎、竹内好ほか編『近代日本思想史講座 7 近代化と伝統』、筑摩書房、1959 年。
- ・日本キリスト教歴史大辞典編集委員会『日本キリスト教歴史大辞典』、教文館、1988 年。
- ・埴谷雄高『埴谷雄高全集 第三巻『死霊』』所収、講談社、2000 年。
- ・森鷗外『鷗外全集 第 27 巻』、岩波書店、1972 年。
- ・みなもとごろう『演劇・戯曲の近代』、久保田淳ほか編『岩波講座 日本文学史 第十一巻 変革期の文学 III』、岩波書店、1996 年、145-169 ページ。
- ・森岡清美『明治キリスト教会形成の社会史』、東京大学出版会、2005 年。
- ・山泉進責任編集『社会主義の誕生 社会民主党 100 年』、論創社、2001 年。

-
- ・ 山室静「近代文学」と私の立場」、小田切進発行・瀬沼茂樹編『近代文学』復刻版 解説・細目・執筆者索引』所収、日本近代文学館、1981 年。
 - ・ 山室静『北欧文学の世界』、東海大学出版会、1969 年。
 - ・ 山室静『山室静著作集 1 現在の文学の立場』、冬樹社、1972 年。
 - ・ 山室静『北欧文学ノート』、東海大学出版会、1980 年。
 - ・ らいてう研究会編『「青鞥」110 人の群像』、大修館、2001 年。
 - ・ Thunman, Noriko: *Selma Lagerlöf i Japan*. I: Vinge, Louise (red.): *Selma Lagerlöf seen from abroad. Selma Lagerlöf i utlandsperspektiv. Ett symposium i Vitterhetsakademien den 11 och 12 september 1997*. Kungl. Vitterhets Historie och Antikvitets Akademien. Konferenser 224. 1998, s. 41-60.
 - ・ 小山哲司「神を愛し、人を愛し、土を愛す—今に生きるデンマーク国の話—」
http://www.asahi-net.or.jp/~pv8m-smz/archieve/Gott_Mensch_Erde1.html
(閲覧日:2007 年 8 月 1 日)

[2009 年 11 月 30 日受理. 2010 年 1 月 28 日掲載決定]